2004 年度異文化間教育学会研究奨励費　研究成果報告書（概要）

ケアと規律

―英国の初等教育における“パストラル･ケア”の事例研究―

館林　保江（中央大学大学院）

はじめに

本研究の目的は、英国の“パストラル・ケア(Pastoral [1] Care)”の教育実践を参与観察しながら､なぜある公立学校においてバランスの取れた“ケアと規律”が可能になっているのかを検証することである。日本の｢生徒指導｣や｢生活指導｣に対比されることがあるパストラル・ケアとは、児童の管理・統制や個別的対処にとどまらず、予防的指導を含み、教科である PSHE（Personal, Social and Health Education :｢人格・社会性および健康の教育｣）や｢市民性教育｣も内包する概念と実践である。さらに校内に秩序ある支援的環境を形成し､全体の管理運営も包括する[2]､英国の教育実践において重要視されるものである。

本研究ではロンドン南西部に位置する様々な特徴を持つ公立のある初等学校でのパストラル・ケアの実践を事例に取り上げ、子どもへの取り組みとしてケアと規律、管理職によるリーダーシップを含めた職員の技量向上のための支援システム、そしてコミュニティーとも連携した学校経営的条件の設備にして、その実態の把握と特徴を探究する。

研究対象校と研究背景

ロンドン南西部に位置する調査校の BW 校は、3 歳から 11 歳までの幼児・児童の 450 名が在籍する英国においてはかなりの大規模校である。児童の約 80%が何らかのエスニックな背景を持ち、290 名が英語を追加言語として学び、140 名が英語学習において初歩段階である。児童が話す言語は 20 言語以上あると言われる。経済的にも恵まれない複雑な家庭環境に置かれる児童が多い。里親に育てられる児童や難民の児童はそれぞれ 15 名程在籍している。校内ではコミュニティーの教育・福祉機関と連携し、保護者へ｢英語｣、｢コンピューター｣、｢肯定的な親業｣などの無料講座を開講している。

報告者は、英国での修士課程でベスト教授のもと、2000 年に BW 校を含む初等学校と中等学校の 2 校ずつを取り上げた事例研究を実施した。その後、BW 校より研究協力の内諾を得て、2003 年春の 2 ヶ月間と秋の 2 週間に参与観察を実施している。

２００４年の調査期間と概要

ここで報告するのは、それまでの調査を踏まえ 2004 年に実施した 2 期間、第Ⅰ期（2004 年 6 月 11 日から 7 月 18 日）と第Ⅱ期（2004 年 11 月 19 日から 12 月 19 日）の調査の内容である。

児童に対する“ケアと規律”に関しては、学校の教育理念に謳われる、「他者の気持ちを思いやる態度」や「自己規律」の態度の涵養が、PSHE の授業や集会或いは日常の学校生活で繰り返し行われる。児童の間のいじめや喧嘩への対応では予防的な対応を含め、“一人一人は違うがみんな平等であること”を繰り返し指導する。また、児童が抱える様々なニーズに対しては、三種類の特別職員が雇用される。情緒的問題を抱える児童のためのラーニング・メンター(Learning Mentor：LM)、英語を追加言語として学ぶ児童とアフリカ系カリブ民族の児童のために EMAG（Ethnic Minority Achievement Grant）教師、学習面における特別な教育的ニーズを持つ児童（Special Educational Needs：SEN）のための学習補助員(Learning Support Assistant：LSA)である。

BW 校に勤務する 55 名の職員は、18 名の上記の特別職員の他、教員免許を所有しない補助職員も多く、その半数以上はパート勤務である。そのためクラス担当の教師を含め職員間における支援体制には、管理職によるリーダーシップが大きな役割を担う。学年毎にはベテラン教師が若手教師に授業計画やクラス運営の指導をし、校内には教師同士の授業評価のシステムが存在する。管理職は、職員の間での協力的な関係の維持のためには情報の共有と密なコミュニケーション、そして開放的な議論が出来る雰囲気が大切であると言う。

そして、学校の教育実践の質や管理運営のためには、保護者やコミュニティーとの連携が重要であると言う。特別行事や特別活動には、必ず保護者へ招待状を送り良好な信頼関係を構築するように努める。しかし、英国に移住してきた文化的背景の異なる保護者は、それぞれの出身国により教育に対する考え方の違いや英国に滞在する理由なども異なり、そのために子どもの学習への関心と学校の教育活動への参加の態度も一様ではない。保護者が学校へ関心を持ち、学校と協力的な関係を図るために、管理職を始めとする職員や学校理事会は地道な努力を継続している。

まとめ

BW 校における調査研究は、第Ⅱ期に BW 校に 21 年間勤続した校長が退職を迎えたことで一段落した。しかし、次回の教育水準局の視察が行われた後に、再度訪問し、新校長のもとでの校内におけるケアや規律、リーダーシップ、コミュニティー(3)との連携がどのように変容し発展を遂げているのか研究を継続する意向である。英国社会が抱える教育的課題に対して、BW 校の実践は何を示唆しているのか、また、英国の経験から日本社会は、現在或いは近い将来起こりえる教育的課題に対して、何を学ぶことが出来るのか、今後も研究と考察を深めていきたい。

註

(1) 日本では馴染みのないこの言葉は、キリスト教の宗教概念に由来するものである。“pastoral”とは、ラテン語の「食料やスピリチュアルなものを与え育てること」を意味する“pasco”を語源に持ち、「牧師の、牧歌的な」の意味を持つ。聖書の寓話に見られる「羊たちが良い羊飼い（Good Shepherd）により、道に迷わぬよう導かれるよう」に、牧師が信者と接するように、教師が生徒の学習・人格・生活の指導をすることを指して用いられ始めた。寄宿制パブリック・スクールにみられる英国の伝統的教育の概念と実践である。

(2) パストラル・ケアの活動領域に関しては様々な議論があるが、ここではロン・ベスト（Ron Best）教授が提案した定義を援用する。Best, Ron, 1999, 'The Impact of a Decade of Educational Change on Pastoral Care and PSE: A Survey of Teacher Perceptions', *Pastoral Care in Education* Vol.17,No.2, pp.3-13.

(3) コミュニティーとの関わりは、2004 年 9 月にこの地区に公費維持のイスラム教学校が開校したこともあり、その学校との関わりやコミュニティー内のイスラム教徒児童達の移動などが注目される。